

彼女——フランドール・スカーレットとは何者だったのか。

今日はそれを語ってみようと思う。

私は彼女のことを知っている。いや、知りすぎていると言ってもよい。

何しろ……彼女と私は二つで一つだったのだから。

私が表で彼女が裏だとか、或いはその逆だとか、そんなありふれた話ではなく、

彼女は私で私は彼女だったのだ。文字通り、言葉通りの意味で。

無論、私は吸血鬼などではないし、あんな怖い姉を持っているわけでもない。ただの、どこにでもいる極めて平凡な存在だ。あのような強さは持っていないし、代わりに何ができていない。それでも……彼女と私はどこまでも同一だった。

同一になるしかないほど——彼女は何も持っていないかったのだ。

無垢<sup>むく</sup>で無邪気……幼子を表現する時、そのような言葉を用いることがある。

だがそれも今となれば、彼女——フランドール・スカーレットにしか用いることのできない表現だったと私は思う。彼女は穢<sup>けが</sup>れを持っていない。持つことすらできない。邪気とも無縁。

そのようなもの最初から抱くことすらできない——そんな存在だったのだ。

だから彼女は、私を求めた。  
求めざるを得なかった。

無論、それ自体に罪はなく、子供が親を真似るように、或いは当たり前のことだったのかも  
しれないけれど。そしてそれが——私である必然などは欠片もなかったけれど。

それでも私が彼女に必要とされたことは、必然ではなくとも運命ではあったと思う。

あの時のことは後悔しているし、自分の運命を呪いさえしたけれど、今となっては……  
いや、止めよう。

正直なところ、うまく言葉にする自信がない。

言葉にすれば、それはきつと嘘うそになってしまうだろう。

だから私は語ろうと思う。

何が正しくて、何が間違っていたのか——当事者である私ではどうやったって客観的  
判断を下せない。だから起こったこと、知っていることをありのまま語ろうと思う。

たった半月程度の、あの館で過ごした日々を。

たった七日間だけの、彼女と過ごした日々を。

たぶん私は忘れない。

きつと彼女も忘れない。

痛くて、苦しくて、絶望して、

でもきつと、それだけじゃなかったと。

まやかしではなく、確かにそれはあつたのだと、そう信じたいから。

彼女の物語を——語ろうと思う。